

船宿

御手洗の港が発展するにつれ、地元の商人が船宿の建設を始め、船が入港している間、船の将校に宿泊や接待を提供し、船の代理店の役割を果たすようになった。江戸時代（1603-1867）の内海貿易が盛んになると、船宿はさらにサービスを提供するようになった。船宿は、船に食料を補給したり、新しい船員を供給したり、気象情報を提供したりした。また、貿易取引の交渉や船の商品の買い手を探すのも手伝い、本質的には問屋の役割を担っていた。その船宿の一つである若本屋は、かつて木村家が所有していたもので、現在は呉市の所有となっている。1994年に有形文化財に指定された。

江戸時代末期には、船宿の中には、各藩の貴族が所有する船を専門に扱うようになったものもあり、その場合はその藩の特別な許可が必要であった。現在、船宿として使用されていた建物は、大洲藩・宇和島藩（現愛媛県）指定の若本屋、延岡藩（現宮崎県）指定の竹原屋、鹿児島藩・熊本藩の脇屋の3軒のみが残っている。これらの専用の船宿に宿泊する際、彼らは玄関の上に藩旗を掲げてその存在をアピールしていた。

江戸時代前半は貴族階級が国の文化や政治の多くを形成していたが、後半になると商人が下級貴族を上回る富と権力を持つようになった。貴族は一般的に米という形で税金を受け取っていたため、江戸時代後半の米価の下落の影響を強く受けていた。一方、同時代には商人がより豊かになり、影響力を持つようになった。貿易船の装備や資金調達は高額であり、一部の貴族はその費用を

負担することが困難であった。そこで、船宿を営む商人たちは、支配階級の顧客に融資を行うという新しい事業を始めた。